

スポーツ実況中継における「物語」

—全国高校サッカー選手権決勝戦を例に—

深澤弘樹

1. はじめに

テレビの技術革新が進むなか、高画質、高音質で届けられるテレビでのスポーツ観戦は人々にとって手軽に楽しめる娯楽となっている。多くの人々にとって、スポーツが「する」ものとしてだけでなく「みる」ものとしての比重が高まっているいま、スポーツをみる経験とは、多くの場合、テレビ観戦なのである。衛星中継が日常化している昨今は、五輪やサッカーW杯などの国際大会であってもタイムラグなく放送され、迫力ある映像をデジタルテレビでみることが可能である。さらには、テレビによる中継では、実況者が試合展開を事細かに描写し、知識豊富な解説者がわかりやすい言葉でプレーの意味を説明してくれる。こうして、スポーツはお茶の間に入りこみ日常的に消費されている。

しかしながら、テレビで放送されるスポーツ中継は、起きている出来事をありのままに伝えているかというと実はそうではない。放映されているのは送り手の主観的な判断で切り取られた「社会的現実」であって、メディアの送り手の意図が必ず含まれている。テレビ番組とは送り手が恣意的に選び取った映像と音声によって成り立っているのであり、現実には起きていることを伝えるスポーツ中継においても送り手の意図は必ず反映される。つまり、私たちにとってスポーツ中継をみるということは、試合会場で繰り広げられる生の試合をみることとは質的に異なることと理解すべきであり、現場での試合観戦とは違った楽しみを実況中継がもたらして

いることを自覚せねばならない。

こうした問題意識のもと、本稿は、スポーツ中継において番組そのものの方向性を大きく左右する実況アナウンサーと解説者の語りに焦点を当て、中継のなかで語られるコメントの言説分析¹を行う。実況中継における言語実践に注目する理由としては、アナウンサーと解説者の語りが視聴者に解釈の枠組みを提供しているからであり²、そこには当該社会の常識を反映する不可視の権力作用が存在している。

さらに、スポーツ中継は視聴者にとって手軽に楽しめるエンターテインメントとして消費され、ともすればスポーツの醍醐味を十分に伝え切れていないとする批判も根強い。例えば、国際試合で恒常的になされるドラマティックで情緒的な実況中継は「応援放送」とされており、「私たち＝日本人」との立場での応援一辺倒の実況中継にはナショナリズムが前提とされているとする指摘もある(岡田 2002:184-186)。また、高校野球などのアマチュアスポーツでは、スポーツとしてよりも「青春ドラマ」として語られ、人々の生きるモデルあるいは人生訓として語られる傾向も先行研究から明らかになっている(小椋 2000:35-36)。

本稿は、このような指摘がなされているスポーツ中継における言説を「物語」ととらえて、送り手がいかにして実況中継において「物語」を構築するのかを明らかにする。後で詳しく述べるが、「物語」とは時間的順序と因果関係によって結ばれたひとまとまりの叙述であって、事実を伝えるニュースやドキュメンタリーの分野であっても、事実を取捨選択することによっ

て「物語」がつくられる。

以下では、「物語」の観点からスポーツ実況の特性を説明した後、2009年1月に実際に放送された第87回全国高校サッカー選手権大会決勝戦を例として、スポーツ中継における実況アナウンサー、解説者のコメントを分析し、試合中継のなかに織り込まれた「物語」とその構成のプロセスを考察する。

2. 「物語」としてのスポーツ中継

(1) 「物語」としてのスポーツ実況

本稿では「物語」論の観点からスポーツ状況の分析を進めていくが、「物語」とは何を意味するものなのかを確認しておく。井上俊は物語の定義を「現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したもの」(井上 1996:21)としていて、ある出来事を「物語」として叙述する際には時間的順序と因果関係が不可欠であることを指摘している。また、藤田真文によれば、「物語」には、一定の登場人物が必要となる。その人物が時間の経過とともにどう変化したかによって「物語」が形づくられていくのであり、「物語」に必要な要素として、①一定の登場人物、②時間の経過と連続する出来事、③登場人物の変化が挙げられる(藤田 2006:30-33)。

人々は物事が意味づけられ「物語」の形式を取ることによって出来事を実感を持って認識できるのであり、その意味では、さまざまな物語を流布させるマス・メディアは、「物語提供機構」(井上 1998:16)といってもよいだろう。新聞やテレビ、ラジオといった媒体の違いやニュース、ドキュメンタリー、ドラマなどのジャンルの違いはあったとしても、マス・メディアが提供する情報は必然的に物語性を帯びる。

通常、物語というと、ドラマや映画などフィクションの分野のみで用いられる言葉と思われがちだが、必ずしもそうではない。なぜなら、

出来事を意味づけ、解釈することによって出来事が因果関係で結ばれて「物語」となるからである。つまり、フィクション、ノンフィクションであるかの違いは、物語形式を採用しているか否かではなく、「架空(虚構)の物語」として語られるか、「現実(本当)の物語」として語られるかの違いとなる(丹羽 2002:75)。

また、「物語」は人々に「教訓」や「喜び」「恐怖」「憐れみ」などの人生訓や感情などをもたらすことが指摘されていて(藤田 2006:37)、その意味では、勝ち負けがはっきりし、人間の感情がむき出しとなるスポーツの世界は送り手側からすれば「物語」を構成しやすい分野となる。それゆえ、選手、監督の栄光や挫折など、手っ取り早く視聴者の共感を呼ぶ感動のドラマが視聴率を稼げる重要なコンテンツとしてお茶の間に届けられている。

例えば、スポーツ・ドキュメンタリーを考えてみよう。阿部潔は、スポーツ・ドキュメンタリーが引き起こす感動は物語性に起因すると述べている(阿部 2008:85)。阿部は、スポーツ・ドキュメンタリーに典型的なパターンとして、栄光→挫折→努力→再起というパターンを挙げ、栄光を得たあるチームや選手が不振に見舞われるものの、努力をすることで再起を果たすという例を提示している。こうした「物語」では、勝敗という結果ではなく再起に向けた生きざまが人々を感動させることになる。さらに、阿部は、スポーツ・ドキュメンタリーにおける感動はスポーツ実況における感動とは質的に異なる点を指摘し、番組制作時に結果が出ているドキュメンタリーではスポーツが引き起こす感動を構造化しやすいと述べている(阿部 2008:86-88)。

では、本稿で問題とするスポーツ実況は「物語」とはいえないのだろうか。実況では勝敗の行方がわからないだけに、「予測不可能な勝負の行方」に人々はハラハラドキドキしながら画

面をみつめる。しかし、試合自体が凡戦であったときには、面白みに欠けるため、たとえライブ中継であっても退屈なものになってしまう。つまり、実況中継では「物語」として伝えることが構造的に困難となるのである(阿部 2008:85-86)。

しかしながら、筆者自身がスポーツ実況を担当した経験からいうと、実況者はたとえ試合が退屈であろうとそこに「物語」をつくらうとする。構造的に物語化することが困難だとしても、そして、試合展開が実況者の予想に反するものだったとしても、実況者は「物語」を構築し「わかりやすく面白い」試合として視聴者にみてもらえるよう筋書きを描こうとするのである。

(2) スポーツ中継における「物語」の中心

続いて、実際にスポーツ実況が「物語」として構成される場合、話の筋の基準となるものは何か、物語はどういった要素によって成り立っているのかを考えてみる。

亀山佳明は、物語として語られるためには、「一定の事象の流れを一定のパースペクティブから切り取り、多様な諸事実を選択するとともに一定の秩序を有するものへと整理される必要」(亀山 1990:20)があると述べ、物語の中心の存在の必要性を指摘している。物語の中心とは、「諸事実(部分)を取捨選択して配列するための基準(価値)」(亀山 1990:21)であり、その際の基準とは社会の常識やモラルである。

こうした社会の常識やモラルが前景化しやすいのがスポーツ報道であり、スポーツの技術論よりもそれ以外の事柄が多く取り上げられる。選手の喜怒哀楽が表面化しやすいスポーツでは、選手の思いに迫ることによって人間性に焦点を当てた描き方がなされるのだ。こうした報道手法を西島建男は「物語ジャーナリズム」と

評し、その結果として、「スポーツ選手個人の物語化」と「スポーツそのもののドラマ化」が引き起こされ、スポーツ報道では人間社会のあるべき姿が比喩的、象徴的に描かれると指摘している(西島 2000:32)。

こうした描き方は、感動の構造化がしやすいドキュメンタリーだけではなく、ライブの実況中継でも同様である。たとえばチームスポーツであっても特定のスター選手だけが注目されたり、達成が期待される記録のみがクローズアップされることも多い。送り手側からすれば、この手法は一般の視聴者に興味を持ってもらうための戦略であり、「わかりやすさ」を目指すものである。しかし、ともすればスター選手に偏ったり、下手な人間ドラマに墮し、スポーツの醍醐味を伝えることにならない危険性を秘めている。

特に、今回、問題とする高校スポーツの場合は「教育の一環」とみなされることが多く、技術、戦術面で劣るがために、視聴者が選手に親近感を持つよう選手や学校の情報を積極的に取り上げる傾向がある(山本 2003:55)。その代表的な例が高校野球である。小椋博は、甲子園中継の特徴として、人間個人や社会集団に関する出来事が人間ドラマとなって道徳的に語られることを指摘していて、言説の特徴として「スポーツによる人間形成」、「高校野球は教育の一環」「チームのために犠牲になること」「下積みの大切さ」「高校生らしい純真さ」「郷土の誇り」などの価値や徳目を挙げている(小椋 2000:35)。

高校野球、高校サッカー中継に携わってきた筆者の経験からいえば、取材段階からプロスポーツとは違った要素が求められるのが高校スポーツである。プレーする選手、監督、チームに焦点が当てられ、取材の際には、事細かに選手、監督の生い立ち、家族関係、これまでの怪我、チーム内の絆などプロスポーツとは違った人間性がにじみ出る項目を聞き出すことが求められる。

高校スポーツはプロスポーツに技術的に劣るため、試合そのもののレベルは高いとはいえない。そうした試合の質を補うものとして、実況はサイドストーリーに流れる傾向がある。また、アマチュアスポーツは必ずしも勝敗が全てではない。実況者もそうした点を内面化した上で実況に臨み、「人間ドラマ」「高校スポーツの素晴らしさ」を伝える。そこでは、選手、監督の生きざまが語られ、万人受けする「青春物語」に勝者、敗者ともに組み込まれていく。

(3) スポーツ中継における「物語」の構造

次に、スポーツ実況を「物語」ととらえる場合、どのようにして「物語」が構築されていくのかを物語の特徴である時間的経過と因果関係の両面から考えてみたい。

当然のことではあるが、実況アナウンサーの役割は眼前で行われている試合の状況を克明に伝えることである。例えば、サッカーであれば、誰がボールを持っているのか、どのポジションを取っているのか、フォーメーションがチームとして機能しているのか、どちらのチームが主導権を握っているのかなどが語られ、当該スポーツの知識がない視聴者でもあっても面白く観戦できるようにわかりやすい言葉を用いながら実況中継は進んでいく。

現在・過去・未来の時間軸で考えると、実況者をもっとも重視すべきは「現在」である。ライブ映像を視聴者に届けているのであるから「いま」何が起きているのかを映像に合わせて的確な表現で伝えることが実況者には求められる。ただし、実況中継では、「現在」を伝えながらも、実は「過去」の出来事も織り込まれている。それはチーム、選手の記録であったり、選手、監督の試合前のコメントであったりするもので、事前に取材や下調べによって得た情報である。さらには、実況アナウンサーは「現在」を追いながら、「未来」として、勝敗や達

成が期待される記録などを予想する役割も担っている。

サッカーのプロチームであるベガルタ仙台の試合中継を分析した山本史華は、実況中継の役割として三点を挙げている。一点目が「知識の提供」、二点目が「試合の実況放送」、そして、三点目が「ゲームの展開」であり、これらは順に、「過去」、「現在」、「未来または可能性」に対応している(山本 2000:74)。「物語」との関連で注目すべきは、現在の試合展開を追いながら、そこに過去のデータや取材で入手した選手のコメントが挿入され、未来である「ゲームの展開」に結びついている点である。未来の展開の予測とは「もし〜であったら〜であろう」という仮定法で語られることが多く、実況アナウンサーは、選手が今まさに行ったプレーの意味を解説者のコメントを借りながら伝え、未来の勝敗へとつなげていく作業を行う³⁾。

つまり、実況中継とは、「現在」を描写しながら「過去」を織り込み、「未来」につなげていく営みなのである。実況アナウンサーは「物語」の語り手となって視聴者を試合へと引き込む役回りを担っているといえよう。

試合の途中でプレーの意味や記録を挟み込むことについて、元日本テレビアナウンサーの今井伊左男は「くさびを打つ」という表現を使っているが(今井 1994:105)、これはまさに、試合途中の布石が、「なぜ勝てたのか」「記録を塗り替えることができたのか」という「物語」としての解釈を助けることを意味する。

その際には、前述の通り、「物語」における主人公の設定が不可欠であり、実況者は事前に決めた注目選手や試合中に活躍した選手を主人公に据えながら、試合展開をわかりやすくかみ砕いて図式化しながら追っていく。つまり、スポーツの実況を行うアナウンサーは、試合展開がどうなるろうとも、めまぐるしく変化する試合展開に合わせて主人公を設定あるいは変更しな

がら、勝ちあるいは負けという結果につなげていく作業をしているのである。

スポーツ中継を面白くみてもらえるかどうかは、実況者の「物語」化の成否にかかっている。スポーツとは「筋書きのないドラマ」であり、勝敗の行方は誰にもわかりはしない。だが、勝敗が決したときに人々はなぜ勝ったのか、なぜ負けたのかを知りたい。実況者は、達成が期待される記録や視聴者をひきつける選手の人間ドラマを織り込みながら、眼前の試合の流れを的確にとらえ、視聴者が納得できるような形の「物語」へと仕上げていく。

以下では、実際にテレビで放送された全国高校サッカー選手権を例に、いかなる「物語」が語られたのかを考察する。

3. 全国高校サッカー選手権決勝の言説分析

(1) 分析の対象と方法

今回、題材として取り上げたのは2009年1月12日に日本テレビ系列で放送された第87回全国高校サッカー選手権大会決勝（国立競技場）の鹿児島城西高校（小久保悟監督：8年ぶり2度目の出場）と広島皆実高校（藤井潔監督：3年連続8度目の出場）の試合である。この試合の実況中継は、キックオフ直前の午後2時に始まり午後4時10分まで放送された。本分析では、番組開始から番組終了までをハードディスクレコーダーに録画し、そのデータを再生して、実況アナウンサー、解説者、ベンチリポーター（2人）、応援席リポーター（2人）のコメントを文字化して言説分析を試みた。中継にかかわったアナウンサー、解説者は以下の通りである。

実況：藤井貴彦アナウンサー（日本テレビ）

解説：武田修宏（元日本代表FW）

鹿児島城西ベンチ：内田直之アナウンサー（鹿児島読売テレビ）

広島皆実ベンチ：宮脇靖知アナウンサー（広島テレビ）

鹿児島城西応援席：川島秀成アナウンサー（福井放送）

広島皆実応援席：伊藤久朗アナウンサー（静岡第一テレビ）

(2) 試合の概要

試合の分析に入る前に、広島皆実が初優勝した決勝戦の概要について紹介しておく。試合は開始直後から広島皆実ペースで進んだものの、前半20分に鹿児島城西のFW 大迫勇也選手が先制ゴールを決め、鹿児島城西が先制する。しかし、23分に広島皆実のFW 金島悠太が同点ゴールを決め、さらに33分にMF 谷本泰基が勝ち越し点を奪い、2対1と広島皆実がリードして前半を折り返す。後半は両チームとも得点が奪えず、迎えた17分に鹿児島城西の2トップの一角、FW 野村章悟が得点して同点とする。しかし、広島皆実は後半21分に金島がこの日2点目となるゴールを決め、これが決勝点となって広島皆実が3対2で鹿児島城西を下して初優勝を飾った。

本稿では、この試合の実況中継のなかで、様々な事柄が時間的順序と因果関係に沿ってどう結びつけられているのか、また、注目選手をどう設定し、試合の展開に応じてコメントを調整しているのか、試合の図式化を行っているのかに着目して分析を行った。以下では、まさに「いま」行われている「現在」の試合において、「過去」であるデータ、選手の思いが盛り込まれ、未来の勝敗につながっていくのか。それと同時に、高校スポーツの特徴である青春ドラマがいかにしてつくられていたのかを明らかにしていく。

(3) 言説分析

それでは、決勝戦においていかなる「物語」が語られたのかを、試合開始から勝敗が決する

まで試合の流れに沿って明らかにしていく。

まず、実況アナウンサーの最初の言葉に注目する。アナウンサーの語りは視聴者にとって準拠となるものであり、その枠組みがもっとも端的に表現されるのが番組スタート時のオープニングコメントである。ここでは、その試合の持つ意味や両者の対戦では何がみどころか、勝敗を分けるポイントは何かが図式化されて示される。実況アナウンサーにとって、このコメントは最も気を使う箇所であり入念に作成する。この試合におけるオープニングコメントは以下の通りであった。

【1】オープニングコメント

藤井：第87回の決勝は、歴史に残る名勝負が生まれるかもしれません。すでに選手権の最多得点記録27ゴールをたたき出した鹿児島県代表、鹿児島城西。広島伝統の守備で決勝まで4試合の完封、広島県代表、広島皆実。日本一鋭い剣と日本一硬い盾はどちらが強いのか、国立に新たな歴史が生まれようとしています。第87回全国高校サッカー選手権大会、4082校の頂点が決まる決勝戦。優勝旗は、広島で止まるのか、九州に入るのか。関門海峡を挟んだ熱戦がこの後です。

【1】のコメントでは、高い攻撃力を持つ鹿児島城西に対して広島皆実が堅守を誇っていることが紹介され、両者のチームカラーが提示された。攻撃の鹿児島城西に対して守りの広島皆実という図式が示されたわけである。さらには、「名勝負が生まれるかもしれない」と未来を予測する言葉で視聴者をひきつけるのと同時に、県名や地域名を出すことによって地域アイデンティティを喚起している。

そして、試合は、オープニングコメントから3分ほどしてキックオフとなる。試合開始後、

実況者からはこの試合の主人公が設定された。それは、ここまで9得点を挙げ、この試合で大会新記録を狙う鹿児島城西のFW大迫勇也選手であり、大迫選手を「物語」の主人公として試合は進むことになる。次に示すコメントでは、大迫勇也選手の凄さが数字で紹介され、鹿児島城西の攻撃力を象徴する存在として示されている。一方、堅守を誇る広島皆実にとっては、いかにして大迫選手を押さえるかが勝敗のカギを握るとされた。

【2】前半30秒

藤井：ともに初優勝がかかります。鹿児島城西と広島皆実高校の対戦です。鹿児島城西は、県勢3大会ぶり6回目の決勝を迎えました。第83回鹿児島実業以来、4大会ぶりの優勝を狙います青いユニフォーム鹿児島城西高校。歴代最多タイの9ゴールを上げている大迫勇也を中心にここまで27ゴールを挙げてきました。これは選手権最多記録になりました。鹿児島実業以外で初の決勝進出を決めている鹿児島城西高校です。武田さん、大迫勇也選手にどれくらいボールが入るかというのがひとつ鹿児島城西の攻撃の軸になりますね。

武田：そうですね。逆に言ったら広島皆実はどういう風に組織として防ぐのかというのが注目ですね。

藤井：広島県勢、40年ぶり、15回目の決勝になりました。第46回、山陽高校の両校優勝以来、41年ぶりの全国制覇を狙っています広島皆実高校。……広島皆実高校は、勝てば広島県勢9回目の全国制覇になります。兵庫の16回、埼玉の13回、静岡の10回に次ぐ好成績を挙げている古豪広島、そして鹿児島実業が率いてきた鹿児島の歴史、鹿児島と広島の対決は、雪の国立での決勝になりました。

試合が始まって間もない時間帯では、実況者は注目選手を掲げながら両チームが取るべき戦術や戦いなどを解説者のコメントを交えて示す。また、この決勝では、大迫選手の記録がことさらに強調され、1点を取れば大会新記録であることが声高に伝えられた。そして、【2】のコメントの後半部分でわかるように、地域代表が出場する高校スポーツ中継では、選手の個人記録と同様に、優勝〇〇回、県勢として初優勝など、記録が大きな意味をなし、地域代表としての色合いも濃くなる。この試合でも両者が初優勝であること、鹿児島、広島代表が過去どのような戦いをしてきたかが盛んにコメントされていた。こうした記録、数字も「物語」を構成する要素である。

さて、試合は当初、鹿児島城西の攻めを広島皆実がどう防ぐかにポイントが置かれていたが、決勝戦で主導権を握ったのは広島皆実であった。それを表現する実況者のコメントは以下の通りである。

【3】前半2分

藤井：鹿児島城西高校はここ3試合、いずれも前半の5分までにゴールを挙げているという、立ち上がりたまたみかけるところなんです、広島皆実が押しているという展開、意外ですね。

【4】前半8分

藤井：立ち上がりシュートの数、広島皆実が1本、鹿児島城西はまだ1本もシュートがありません。ここまで5試合で93本シュートを打っている鹿児島城西高校の得点力、シュート力を広島皆実の堅守が抑えているという前半立ち上がりですね。

前半立ち上がりは、攻撃の鹿児島城西に対し

て守りの広島皆実という図式が崩れたことに対して、【3】では「意外ですね」という言葉を用いて、広島皆実が押している展開であることが強調された。実況者の役割とは、「過去」のデータを駆使して「現在」を伝えながら「未来（勝敗）」つながる予測をすることであると前に述べた。試合とは、実況者の予測を裏切ることもあり想定通りには進んでいかない。実況者は試合前に提示した試合の図式が崩れた場合には、「なぜそうなっているのか」を解説に問いかけ、現在の状況を的確に描写しつつ、さらに未来を予測するという難しい作業を行うことになる。この試合の立ち上がりがまさにそうであった。

そうしたなか、実況中継では、立ち上がり15分までにスターティングメンバー、両校のベンチリポート、勝ち上がりが紹介され、視聴者が両校のフォーメーション、戦術、注目選手などを理解できるような構成になっていた。また、高校スポーツでは選手同様に注目を集めるのは采配を振る監督である。この試合でも、どのような指導歴があるのか、指導者として何をモットーとしているのかなど教育者としての面が取り上げられた。以下はその例である。

【5】前半13分

藤井：藤井潔監督はまだ35歳、広島皆実7年目、コーチ歴5年、監督は2年目という若き広島の指導者です。広島の古豪、広島国泰寺高校から広島大学、そしてそのあと、離島で5年間サッカー部の監督を務めたあと、この決勝のベンチに座っています。広島で生まれ育った若き指導者が決勝に広島皆実高校を導きました。

そして、試合は前半20分に動く。注目選手として挙げた大迫勇也選手が得点を挙げたときの実況は次のようなものであった。

【6】前半 20分

藤井：大迫勇也左足のシュート、ゴールが決まった。歴史が変わった。記録を塗り替えた。大会最多10ゴール、選手権新記録達成、そして、6戦連続得点、大会最多タイ記録、左足のシュートが選手権の歴史を塗り替えました。これで1対0、鹿児島城西高校、1点を先制。前半の20分、優勝に一步近づいた。大迫勇也の左足、鹿児島城西高校、鹿児島に優勝旗をもち帰る第一歩、大迫勇也のゴールが決まって1対0です。

ここでは、短い言葉をつなぎながら、体言止めを用いてテンポよく大迫選手の得点を称え、大げさとも思える盛り上げ方をして得点シーンが伝えられた。「歴史が変わった。記録を塗り替えた」というアナウンサーのコメントは、試合開始直後から大迫の得点を強調していたことによって生きるコメントであり、前述の「クサビを打つ」作業が功を奏した例といえよう。

また、このとき、実況アナウンサーは、押している広島皆実ではなく鹿児島城西が得点を挙げたことは何を意味するのかを解説者に聞いた。それが【7】のコメントである。

【7】前半 21分

藤井：いやあ、それにしても、武田さん、大迫勇也に対してボールがなかなか入らなかった。それにわずか1本か2本のパスでチャンスをゴールに結びつける。

武田：まあその辺はねー、もう常に狙っている、自信があるんでしょうねー。数少ないチャンスでも。

藤井：これで大会すべての試合でゴールを決めるということになりました。実は鹿児島県の県予選でも5試合連続で得点をしている大迫勇也、選手権の11試合すべての試合でゴールを決めました。超高校級スト

ライカーの大迫勇也です。

このコメントでは、劣勢の局面を打開する存在の大迫勇也の凄さを称え、どれだけの凄さなのかを記録を引き合いに出しながら伝えている。

展開がめまぐるしく変化したこの試合はその3分後、金島選手のゴールで広島皆実が追いつく。以下がそのコメントである。

【8】前半 23分

藤井：金島が準決勝に続いて2試合連続ゴール。ともに2トップが結果を残した。1対1、広島皆実、同点に追いついた。同点に追いついた。同点に追いついた。見事な戦いをみせている両者です。前半の23分、大迫勇也のシュートからわずかに3分後、9番の金島、これは見事な右足のボレー。

試合は振り出しに戻った。ここで実況者に求められるのはこの試合がこの後どのように進んでいくのか、両チームが勝利を手繰り寄せるために必要なことは何なのかを視聴者に提示することである。藤井アナウンサーが前半24分過ぎに発した【9】のコメントがそうである。

【9】前半 24分

藤井：武田さん、1対1の同点になりました。この後、広島皆実はまだ大迫勇也に対するケアを強めなければなりませんね。……どうお考えですか。

武田：広島皆実はね、前半、ここまでの戦い方、非常にブロックを作って組織でサイドをえぐっていくというスタイルがあってですね、ただ、大迫選手はひとつのミスでも必ず点を決めてしまうという決意力がありますから、そういった意味で彼のマークをいままで以上に集中すると思いますね。

試合がなんらかの展開をみせた際には、この得点を持つ意味は何なのか、負けているチームにとっては何が必要なのかを解説者を交えて話される。そのアナウンスメントは、「現在」を「未来」へとつなげる言語実践であり、後から考えた際、「あのとき～であったから、こうなった」という因果関係で結ばれて、結果が出たときに「物語」を形づくることになる。つまり、実況者には、得点がなぜ入ったのか、チームに何をもたらしたのか、今後どうなることが予想されるのかを洞察する力が求められる。

その後、試合は両チーム得点が入らないまま進んでいく。試合が膠着状態にある場合、実況者はプレーを追いながらも、事前に取材で得たチームや選手情報を挟み込もうとする。高校スポーツの場合だと選手の素顔が紹介されることが多い。この試合でもそうであった。例えば、卒業後に自衛隊に入隊する選手や、センター試験を受ける選手など、選手のエピソードが紹介された。個人名や個人データの提示は視聴者が選手への親しみを増す効果があり、高校スポーツの場合は好んで紹介される傾向にある。その一例として金島選手に言及したコメントを挙げておく。

【10】前半 32 分

藤井：実はこの9番の金島はセンター試験を1月の17日、18日の土曜日、日曜日に控えています。実は広島皆実高校で文系で1位の成績を持っているということで宿舎でも参考書を積み上げて勉強を続けながらこの決勝にコマを進めてきました、さあ、その金島。

【11】前半 32 分

伊藤：藤井さん、その金島のお父さんはですね……、サトシさんもいらっしゃって

るんですが、小学校6年生から弁護士になりたい、そんなふうに話をしていたんだそうですよ。この高校3年間で協調性が出てきました。うちの息子は本当に成長しました。そんなふうに話をしてくれました。

【10】において、実況アナウンサーから金島選手が勉強でも頑張っていることが伝えられた後、【11】では、応援席から金島選手の父親の談話によって選手の素顔も紹介された。こうしたコメントでは、金島選手のサッカー選手としての非凡さよりも一高校生としての側面が前面に出ている。

そして、試合は前半33分に動く。広島皆実が谷本選手の勝ち越し点によって2対1とリードする。この時間帯は広島皆実が中盤を支配し、攻撃の形をつくっていた時であった。この後も広島皆実ペースで試合が進み、ベンチからは次のようなりポートが入ってきた。

【12】前半 39 分

宮脇：藤井さん、広島皆実高校、藤井監督は、ボールをまわすこと、これが最大の守備になると話してますね。藤井監督はそれを攻撃的な守備、そう表現しました。

藤井：それを1年間やり続けてきたということです。中盤でボールを奪ってからのプレーですね。……ポゼッションの練習をしてきたという広島皆実。

【12】は堅守といわれている広島皆実がボールをまわしてゲームを支配する練習をしてきたとするりポートであり、そのことによって、広島皆実が攻撃にも力を入れてきたことを視聴者は知ることができる。このりポートによって、広島皆実が攻撃の形をつくっていることに合点がいくわけである。スポーツ中継は実況アナウンサーとりポーターとの共同作業である。試合

展開に合わせてベンチからも有効な情報が入ることによって、「なぜこうなっているのか」という視聴者の疑問に答える働きをすることもあ。なお、前半は、このまま広島皆実ペースで終了、2対1で折り返してハーフタイムに入った。

では続いて、後半のアナウンスメントに注目する。実況者が後半開始前のハーフタイム中に言及したのは1点ビハインドの鹿児島城西の攻撃であった。追う立場である鹿児島城西の攻撃力を強調することにより、得点への期待を高めようという意図が感じられる。

【13】後半開始前

藤井：武田さん、鹿児島城西はここまで平均で最低でも4点以上取ってきているチームです。

武田：そうですねー。まあ、後半にはね、平原選手という素晴らしい選手がサブにいますから、そういった意味でまだまだわかりませんよね。

藤井：鹿児島城西の勝ち上がりをごらんいただきましたよねー、4点以上とって合計27得点ということですから、後半にもこの大迫勇也、大迫希、野村あたりを起点にした得点というのは容易に想像ができそうですね。

武田：そうですねー。そういった意味では本当にボールが来たときに、9番の大迫選手、決定力ありますから……。

この言葉通り、後半の立ち上がりは鹿児島城西がリズムをつかみ、広島皆実ゴールを脅かす。実況コメントでは、相変わらず鹿児島城西ではFWの大迫勇也選手への言及が目立っていた。大迫選手に対しては次のようなサイドストーリーも盛り込まれた。

【14】後半5分

藤井：これだけのプレーをみせながらも、決して天狗にならないのがこの大迫勇也のいいところだとチームメイトは話しています。部室の更衣室の掃除も率先してやる、それをみた下級生がやらざるをえなくなっている状況が作り上げられているということですよ。

先ほどの金島選手と同様に、大迫選手はストライカーとしての凄さよりも、模範的な生徒として取り上げられている。こうしたとらえ方は高校スポーツに特有のものであり、望ましい高校生像、青年の理想像として選手が描かれているともいえるだろう。

また、選手自身のヒューマンストーリーと同時に、チームづくりが強調されるのも高校スポーツの特徴である。前半には広島皆実が攻撃面で成長したことが紹介されたが、後半14分過ぎには鹿児島城西がいかにして自分たちのプレースタイルを確立したかが語られ、この試合では自慢の攻撃力が発揮できていないことが【15】のコメントによって伝えられた。

【15】後半14分

藤井：鹿児島は縦へのフィジカルの強いサッカー、そこにはパスで対抗するしかない、小久保監督はそのパスサッカーを鹿児島城西高校で浸透させました。これで創部16年目、やっと決勝の舞台まで来て花が開きました。そのパスを中盤でつなぐところ。しかし、パスが通りません。広島皆実の守備が堅固です。

そして、後半の17分に試合が動き、ついに鹿児島城西が2対2の同点に追いつく。得点前に実況アナウンサーと解説者はこんな話をしている。

【16】後半 17分

藤井：武田さん、ただ徐々に鹿児島城西が敵陣でプレーする時間帯が多くきました。

武田：そうですね、あのしっかりと中盤つなぐように、特に安田選手ですね、右サイドからチャンスをつくるようになってきましたね。

その直後、得点シーンが訪れることになる。以下が得点シーンのコメントである。

【17】後半 17分

藤井：平原、中には野村が待っている。野村右足のシュート、同点ゴール、同点ゴール、鹿児島城西のパスサッカーが2対2、同点に追いついた。2年生の平原から野村が右足で流し込んだ。これで野村も6戦連続すべての試合でゴールを決めた。2トップがいずれも6試合すべてでゴールを決めた。すごい得点力だ、鹿児島城西、いやー。

武田：切れましたねー。後半から出た平原選手がねー勝負して。

藤井：先制をした鹿児島城西、逆転されたそのあとに野村がゴール、右足のゴールは後半の17分に生まれました。これで2対2、優勝旗をもち帰らなければならない鹿児島のプライドは、野村の右足に託され、そのシュートがネットを揺らしました。いやー武田さん、名勝負となりそうです。

武田：そうですねー、本当に高校3年間のすべてをかけた試合で本当に面白いですねー。

【16】において実況アナウンサーは鹿児島城西の形になってきたと話し、得点への期待を抱かせている。この描写があるからこそ【17】の得点の場面で生きるのであり、視聴者にとつ

ては、「だから得点が生まれたのだ」と納得がいくのである。実況者が「現在」を描写しながら、未来を予想し、それが現実となって「物語」が完成するという典型的なパターンである。また、試合開始直後から鹿児島城西の攻撃力を強調してきたからこそ「すごい得点力だ」との言葉が出てくる。

試合はこれで振り出しに戻った。ここで実況者に求められるのは、改めてこの後の両チームの戦い方を解説者に聞き、クライマックスに向けて試合を盛り上げていくことである。

【18】後半 18分

藤井：さあ、ここで一度ね、武田さん、広島皆実の戦い方を変えなければならぬのか、どうですか。

武田：そうですね、やっぱり、しっかりとですね、相手にとってまずファーストディフェンダーがアプローチすることが大事ですよ。

藤井：このあたりですね、ファーストディフェンダー。

武田：そして、カバーというそういったスタイルをですね、もう一回、原点に戻ってすることが大事だと思いますけれども。

藤井：いやーこの鹿児島城西はここまで、全試合で4得点以上を挙げています。2点で抑えている広島皆実のディフェンスはまずほめるべきでしょうか。

武田：そうですね。

藤井：ごらんのように左側、4点、5点、7点、6点、5点、最低でも4点を取って勝ち上がってきました。……いやー小久保監督が作り上げたこのパスサッカー、何でも小久保監督に話を聞きますと、関東の東海大学に行ったときにロングボール主体の関東のチームなんて1チームもなかった。これだけ面白いパスサッカーがあるんだ

なーと気づいたということです。この面白いサッカーを鹿児島の子供たちにもさせてあげたい。そういった思いで鹿児島城西高校にこのバスサッカーを浸透させました。

やはりここでも、鹿児島城西の攻撃力に対して守備が持ち味の広島皆実であることが強調され、鹿児島城西のバスサッカーに言及してチームづくりの話とからめながら語られることになった。そして、後半20分が経過する。

【19】後半20分

藤井：ここからはイーブンの戦いになるでしょう。

武田：そうですね。本当に大迫勇也選手にボールが入るとチャンスですね。

藤井：2対2の同点です。

武田：中盤の運動量という面ではやっぱり鹿児島城西が少し後半アップしましたね。

藤井：やはり先ほどもご紹介しましたが、徐々に鹿児島城西が広島皆実の陣内でプレーをする時間を増やしています。

【19】では、ここからが本当の勝負であることが語られ、後半は鹿児島城西優位で試合が進んでいることが伝えられた。五輪などの国際試合の中継ではあからさまな日本びいきの放送が許されているが、高校スポーツの場合はどちらかに偏ることは許されない。実況アナウンサーは中立の立場で実況することが求められ、両チームの情報を均等に紹介しようと試みる。筆者の実況アナウンサーとしての経験を踏まえると、試合中に伝えるべき情報は事前にどの場面で言うべきかをシミュレーションしておくものであり、特に試合終盤では、実況者は試合を盛り上げる材料をいくつか用意したうえで、試合展開に応じて言葉を繰り出すことになる。

試合はその後、21分に広島皆実が金島この

日2点目となるゴールで3対2とリードし、試合終盤を迎える。この時間からは頻繁に時間経過が伝えられ、両チームの応援席の表情などを伝えながらクライマックスへと向かっていく。

【20】後半25分

伊藤：藤井さん、こちら広島皆実の応援席ですがねー、やはり大迫がボールを持つとこの応援席からもキヤーという悲鳴が聞こえるんですね、そして、その応援席にはこの思いの詰まった横断幕があるんです。…この横断幕には、監督、選手たち100人以上のメッセージが書き込まれているんです。たくさん思いが皆実を初優勝に導いてくれるはずですよ。

藤井：はい、両者とも初の決勝、勝てば初優勝です。初の決勝同士の対戦は、これが4回目。85回の盛商対作陽、65回の東海大一对国見、57回の古河一对室蘭大谷、初の決勝、国立、4回目の対戦になりました。その武田さん、4回目の対戦ねー、国立競技場での決勝、熱戦、名勝負になっています。

残り時間20分を切ってくると、リポーターの声も切迫したものになり、また、実況アナウンサーの口からは優勝の記録に関するコメントが多くなっていく。

【21】後半26分

藤井：どちらが勝っても初優勝、これで4年連続の初優勝校を生み出すということになります国立競技場です。島原商業、清水商業、東海大一、国見高校の初優勝を重ねたときから時代を経てまた4年連続の初優勝校が生まれようとしています。……まあ、ここ10年の優勝校をみても、九州の

国見、鹿児島実業、こういった面々がこの10年を牛耳ってきました。そこに新たな歴史、鹿児島の鹿児島城西高校が同点に追いついてもう一度日本一にトライする権利を得るでしょうか。

【22】後半 30分

藤井：さあここまで手元の時計で後半の30分、残りは15分になりました。……5番の金島が呼んでいます。ゴールを決めればハットトリックになります。オレンジのスパイク、金島です。クリアー、そして大迫には二人のマークがくる。11番の野村あっさりとボールを押さえて左サイドから選手が上がってくる、そこにパスを出す。クリアーが少し流れました。……手元の時計でこの試合、残りは15分を切りました。

さらには、後半30分を過ぎたところで画面に時計が映し出され、残り時間が少ないことが印象づけられた。続いて31分過ぎにカメラが映したのは「感謝の心」という鹿児島城西の横断幕であった。残り時間が少なくなってからは、負けている鹿児島城西に対しては得点への期待が込められ、そして、勝っている広島皆実の堅い守りが称賛された。次の【23】がそうである。

【23】後半 31分

藤井：いま、31分を経過しています。先ほど映りました野村ですが、実は今大会の今年のチームのテーマ「感謝の心」というテーマを決めたのは先ほどの11番の野村です。……これが感謝の心です。11番の野村にボールが入るかどうか。小久保監督もこの感謝の心というキャッチフレーズをつけてくれて本当に嬉しかったと話をしています。……広島皆実もよく頑張っている、

そして、鹿児島城西も力を振り絞って攻撃を進めている。

そして、残り10分を切ったからは、実況アナウンサーは刻一刻と少なくなっていく時間を伝え、切迫感をあおりながらの実況を行う。そして、リポーターからは選手と同様に運命のときを待つベンチ、応援席の表情が伝えられた。

【24】後半 35分

藤井：手元の時計で後半の35分を越えました。試合時間残り10分を切りました。第87回の全国高校サッカー選手権が10分を切っています。

【25】後半 37分

伊藤：藤井さん、1点リードの広島皆実の応援席ですがねー、20分を過ぎたあたりからもう全員立ちっぱなしになりました。大きな声援が送られています。そして、学校では3階の会議室でいま220人がテレビをみつめているそうなんですよ。イスが間に合わずにもう立ち見で応援。学校の職員、生徒、PTAはもちろん、地域の皆さんがですねー、いま何人も学校に駆けつけているそうです。初優勝に向けて大声援が送られている広島皆実の応援席です。

藤井：手元の時計で後半の38分になります。

【26】後半 38分

内田：藤井さん、鹿児島城西ベンチですが、アップをしなければいけない控えのメンバーがですね、足をもう止めてしまって試合に見入っているんですね。先ほどからスタッフから何度も何度も足を動かさせと注意されるんですけど、それでもねー、もうね、見入ってしまったっている、そんな状態ですね。

試合終了が近づいてくると、話の中心は鹿児島城西が追いつけるかどうか、広島皆実が逃げ切れるかどうかであり、残り時間を頻繁に紹介しながら優勝へのカウントダウンが進んでいることが強調される。さらに、優勝の重みを伝えるアイテムとして、優勝旗の映像が挿入された。そのときのコメントが次の【27】である。

【27】後半 39 分

藤井：あーこれは優勝旗です。これが6代目の優勝旗になりました。一番最初に手にしたのは3年前の野洲高校です。ゴール前、ヘディングシュート。野洲高校、そして盛岡商業、去年は流通経済大学付属柏高校が手にしました。新しい優勝旗になって優勝旗が九州へ渡ったことはありません。関門海峡越えることができるのか、6代目の優勝旗、今、11人対11人のそのピッチのそばに掲げられました。このままですと、87回の優勝が残り5分少々で決まります。

さらには、試合を指揮する監督の表情が画面に大映しになる。

【28】後半 39 分

藤井：今、小久保監督と藤井監督の姿が映りました。広島皆実高校がベスト8で2大会連続止まっていたとき、一番必要だったのは、攻撃力です。どうすれば広島がベスト4、決勝にいけるか考えて、遠征先に選んだのが実は広島皆実の藤井監督、九州、鹿児島でした。その鹿児島に恩返しをする決勝になるか、いや、負けじと鹿児島城西が鹿児島のプライドをみせるか。第87回の決勝、鹿児島代表の鹿児島城西高校、広島代表の広島皆実高校、後半の40分を経

過して得点差は最少得点差わずかに1点です。

【29】後半 41 分

藤井：広島のサッカーも広島観音がインターハイ、そして、サンフレッチェ広島ユースが全日本ユース制覇、その広島、激戦区を勝ち上がるには守備しかなかった。伝統の守備を鍛えるしかなかった。その伝統の守備の上に、戦う攻撃を1年間積み重ねた広島皆実高校です。九州から学んだ藤井監督、そして、伝統の守備、広島の伝統と九州の力強さを合わせた広島皆実高校、手元の時計で42分ですから残りは3分を切りました。鹿児島城西としては何とかボールを取りたいところ。

しかし、鹿児島城西はボールをまわせず持ち前の攻撃力が発揮できない。試合実況は、終始、鹿児島城西の攻撃力対広島皆実の堅守という図式に依拠しながら進んできたが、試合終盤でもいかに広島皆実の守備が健闘しているかが強調された。

【30】後半 42 分

藤井：鹿児島の日本一の得点力をわずか2点に抑えています。2点を与えましたが3点を取った広島皆実。後半の42分です。大迫勇也にボールを入れることができるか。大迫のまわりには緑と黒の縦縞が5人います。

【31】後半 44 分

藤井：手元の時計で後半は44分、残りは1分です。広島皆実、初優勝のカウントダウンが始まりそうです。広島県勢、40年ぶりの決勝戦。長い間、広島が勝てなかった。その勝てなかった長い長いトンネルを抜け

ようとしています。残りが手元の時計で30秒。

そして、鹿児島城西FKの場面を迎え、実況のボルテージも上がっていく。たたみかけるように実況が続き、試合終了の瞬間が近づいてくる。

【32】後半まもなく45分

藤井：さあセットプレーだ。手元の時計で残りは10秒。……手元の時計をみました藤井潔監督です。いま、ゴールキーパーが上がります。ゴールキーパー、鹿児島城西上がります。赤いユニフォームの神園が上がります。神園が上がります。ゴール前、さあセットプレー、184センチの神園、ああ、いまペナルティエリアの外側にぎゅっと22人が固まりました。さあセットプレー、いいボールだ、ゴール前、押さえた。手元の時計で45分を経過、ロスタイムは2分です。ゴールキーパー戻るゴールキーパー戻る。

さらに、ロスタイムになってからも鹿児島城西のチャンスが訪れるものの、結局得点できず、試合終了のホイッスルが吹かれる。優勝の瞬間の実況アナウンサーのコメントは以下の通りであった。

【33】ロスタイム

藤井：今、手元の時計でロスタイム2分が経過するところ、鹿児島城西に残り一つチャンスはあるか、それともこのまま、広島が悲願の優勝を遂げるか、地元広島が育てたサンフレッチェ広島、下部組織の選手たち。そして若き広島の指導者が全国制覇、広島皆実高校、創部60年で初優勝、高校日本一に輝いた。広島県に41年ぶりの優

勝をもたらしました。首都圏開催以降では、国立競技場で初めて優勝旗を手にする広島皆実高校、初優勝。……素晴らしい戦いになりました。第87回の決勝は広島皆実高校が創部60年にして初優勝、そして藤井潔監督、なんと35歳、最年少記録、史上3番目の記録を達成した若き広島の指導者が広島皆実を日本一に導きました。そして、鹿児島城西高校、このユニフォームのブルーとともに感謝の心を忘れずに1年間やってきました。素晴らしい戦いでしたね。

武田：そうですねー、本当に素晴らしい戦いだと思えますし、今日のお客さんも満員になりましたし、本当にみんなに期待や感動をね、与えてくれたチームだったと思えますね。

藤井：鹿児島城西は合計で29ゴールでした。大会記録を5ゴール上回ったこの攻撃力、いやー本当に国立競技場、いっぱいからこの両チームの選手たちに送られています。

優勝が決まったときのコメントでは、初優勝であること、地元広島で生まれ育った若き指導者がチームを優勝に導いたこと、広島県勢として41年ぶりに全国を制覇したことなどが伝えられて勝者に賛辞を送る一方で、注目選手として挙げ、期待通りに大会記録をたたき出した大迫勇也選手の記録を紹介するなどして、両チームの選手の健闘を称える言葉が送られた。優勝が決めたときのコメントには、90分間のなかで言及されてきたことが散りばめられていて、「物語」が完結したことを示している。

このように、実況アナウンサーは、試合のポイントを提示するために図式化を試みたうえで、めまぐるしく変化する試合展開に合わせ、選手の動きや試合の動向を表現する。そして、

試合が動いたときには、なぜ展開が変わったのかを解説者の助けを借りながら描写し、その都度、両チームが「未来」の勝ちを得るために求められることを指摘しながらクライマックスへと導く働きをしている。実況者は、予測不可能なライブの試合を一連の流れのあるものとして描くことはもちろん、チームづくり、監督や選手の思い、支える家族、感謝の念といったヒューマンストーリーを盛り込みながら「物語」へと仕立て上げていくのである。

4. おわりに

今回のスポーツ中継の分析によって、実況アナウンサーは「現在」の試合を描写しながらもそこには事前の取材によって入手した「過去」の情報を織り込み、「未来」となる勝敗を予想して「物語」を構築しようとするのが明らかになった。さらには、分析データとして高校スポーツ中継を取り上げたため、「最後の大会」「感謝」「地域の代表」「教育の一環」など青春につながるイメージが強調される傾向もみとれた。それらの言葉は努力の素晴らしさを伝える人生訓として私たちに語りかけてくる。また、中継全体を通して、選手のプレーを批判するような言葉はなく、できるだけ選手や監督を称える言葉を多く用い、次代を担うスポーツ選手育成へとつながる言説が目立っていた。

ただし、この分析結果をすべてのスポーツ実況に一般化することには慎重でなくてはならない。今後は、プロスポーツと比較して言説にはどのような差異があるのか、国際大会と比較してみてどうか、放送局による違いがあるのかどうかなどを探る必要もあるだろうし、映像面の分析をするなどしてさらなる精緻化が必要となる。

最後に、物語化したスポーツ中継の課題と今後について考えてみたい。視聴者からすれば「物語」としてのスポーツ中継はスポーツの知識がなくても楽しめるため、スポーツのとっつきや

すさに結びつく。今回分析した試合のように、特定のストライカーを主人公に設定して終始注目する手法は、視聴者にとっては、送り手側が試合の枠組みを提示してくれるだけに「わかりやすさ」を提供してもらえる。その一方で、それ以外の選手は脇役へと追いやられていく。「物語」としてのスポーツ実況は問題点も抱えているのだ。

昨今は衛星放送におけるスポーツ中継も数を増やしており、ある程度のスポーツの知識を持った受け手は自ら有料放送を視聴し、より詳しい情報を求める傾向がある。送り手による意味づけは受け手が何を求めているのかに左右されるものであるから、目の肥えた視聴者向けに、より専門性を高めた実況中継が今後求められていくかもしれない。そうなった場合、「物語」と化したスポーツ中継は変化を迫られるのであろうか。

スポーツとは、鍛え抜かれた身体の素晴らしさ、誰も予測がつかない勝敗など、人々の日常を超越した世界であり、そこに人々は引き込まれる。にもかかわらず、「物語」化されたスポーツ中継はわかりやすい図式に落とし込み、ともしれば安っぽい人間ドラマへとスポーツを転落させてしまう危険性もはらんでいる。スポーツの実況中継が花盛りで人々を魅了しているいまこそ、その意味やあるべき姿が問われるべきであらう。

<参考文献>

- 阿部潔、2008、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑：身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社。
- 藤田真文、2006、『ギフト、再配達——テレビ・テキスト分析入門』せりか書房。
- 日吉昭彦、2003、「テレビ中継は何を語ったのか——試合の実況アナウンスの内容分析」・牛木素吉郎・黒田勇編『ワールドカップのメディア学』大修館書

- 店所収、173-198。
- 今井伊左男、1994、「惚れて 歩いて 推理して」、『実況！熱きことばの伴奏者たち』創拓社所収、77-107。
- 井上俊、1996、「物語としての人生」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学9：ライフコースの社会学』岩波書店所収、11-27。
- 井上俊、1998、「現代文化のとらえかた—都市・消費・情報—」井上俊編『新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社所収、2-20。
- 亀山佳明、1990、「スタジアムの詩学—プロ野球を中心として—」亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社所収、3-27。
- 小椋博、2000、「甲子園中継の功罪」青弓社編集部編『こんなスポーツ中継は、いらない！』青弓社所収、27-43。
- 村松賢一、2005、「ニュース番組における『おしゃべりも』」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば2』、ひつじ書房所収、2-28。
- 西島建男、2000、「メディアは真実を報道しているか」、『現代スポーツ評論』第2号、創文企画、28-39。
- 丹羽美之、2002、「1960年代の実験的ドキュメンタリー—物語らないテレビの衝撃」伊藤守編『メディア文化の権力作用』せりか書房所収、75-97。
- 岡田光弘、2002、「スポーツ実況中継の会話分析」橋本純一編『現代メディアスポーツ論』世界思想社所収、163-195。
- 高橋圭子、2005、『『クローズアップ現代』の〈物語〉』三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば2』、ひつじ書房所収、2-28。
- 山本史華、2000、「バカの心得—J2からのサッカー中継批判」青弓社編集部編『こんなスポーツ中継は、いらない！』青弓社所収、67-84。
- 山本浩、2003、「放送席の現実」、牛木素吉郎・黒田勇編著『ワールドカップのメディア学』大修館書店所収、43-64。

- 好井裕明、1999、「制度的状況の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社所収、36-70。

<注>

- 1 言説分析とは、言説の権力作用に着目した言語実践の分析枠組みであり、本稿では、批判的言説分析(Critical Discourse Analysis:CDA)の手法を用いている。高橋圭子は、批判的言説分析について、「<批判的>とは、あたりまえのように見過ごされている物事の意味や価値を厳密に問い直し、そこに潜む問題をとらえ直すという意味である。CDAは、談話を歴史や力関係が内包された<社会的実践 social practice>であると捉え、談話を通して社会的な権力支配が再生産される諸相を分析する」(高橋 2005:63)のものであると述べている。
- 2 会話分析においては、テレビのインタビューやアナウンサー同士の会話などは実際の対面状況とは違う「制度的状況」における会話とされている。また、これまでの会話分析を用いたニュースインタビュー研究ではインタビューの内容には価値があることを表示し、視聴者にニュースの受け止め方の枠組み(フレーム)を与えるものであることが指摘されている(好井 1999:41-42、村松 2005:13)。スポーツ実況においても実況アナウンサーと解説者との対話形式で会話が進み、それは不特定多数の人に開かれたものであるから、同様の機能を果たすことになる。
- 3 会話分析の手法を用いながら、1998年の長野五輪女子モーグルの実況中継を分析した岡田光弘は、実況アナウンサーと解説者とのやり取りのなかには、「現在のパフォーマンスと未来における採点とを結びつける実践的な時間の構造」(岡田 2002:187)が存在することを指摘していて、実況中継は、独特の時間構造に埋め込まれていることを明らかにしている。